

主な仏像

金堂（本堂）には、50 余の仏像が安置されています。位順に配置されており、本尊薬師如来坐像が須弥壇の中央に安置されています。本尊薬師如来の両脇には、平安初期（794 年～1185 年）の作である日光菩薩・月光菩薩が安置されています。この菩薩立像は持ち運び可能であったことから、1471 年に発生した火災から救出されました。創建当初の本尊薬師如来は焼失しています。「他者を救うべく煩悩を消した者には慈しみの心が宿る」日光菩薩・月光菩薩は精巧なお召し物を身にまとい、太陽や月あかりを表す飾り帯や宝冠を持っています。

須弥壇の四隅に安置されている 4 体の仏像は、四天王です。四天王は、インド古来の神であり、仏法を守護する守護神です。頭部周囲には燃える光背があります。足元には邪鬼を踏みつけており、四天王の躍動感のある姿勢、手足、一癖ある表情とともに、邪はよく見る価値があります。

須弥壇の背景に使用されているターコイズ色の和紙は、寺院の修復が行われた 1997 年から 2004 年に作成されました。和紙には皇室の紋章である菊と桐紋が施されています。

その他の仏像

後陣（本尊裏側）には、室町時代（1336 年～1573 年）の如来像 5 体が安置されています。如来像は中央の 1 体を除き、すべて木製であり、この 1 体だけが青銅製で、この 5 体の如来像はもととも境内の五重にあった塔に安置されていました。後陣の 1 番端に立つふっくらとした温和な表情の神様は、大黒天です。七福神の 1 人で、商売繁盛、出世開運をもたらす縁起の良い神様です。

内陣（本尊内側）に戻ると、隅に大きなゾウ 4 頭と小さなゾウにに支えられた延命普賢菩薩が安置されています。仏様はたくさんの手を持ち、多くの人を助けることができるという考えに基づき、この菩薩には手が 20 本あります。ゾウは日本産の動物ではなく、やや風変りな形をしています。胴体が細長く太めであり、人間のような目は水晶で作られています。

本堂の西側には、木製の僧侶の坐像があります。この僧侶は中国から密教を日本に持ち帰り、和歌山の高野山に真言宗を開いた空海です。